

本発表では、ネイチャー・ライティングの原型として位置付けられてきたヘンリー・デヴィッド・ソローの作品に「いま/ここ」¹の視点・感覚が不在であるとする野田研一氏の論考を契機として、スナイダーの作品の位置付けと、その果たす役割について考察する。スナイダーの「目撃」することを重んじる詩作が結果としてこの問題を解消する事実を、仏教思想を念頭に「いま/ここ」の視点から独自の哲学を構築した西田幾多郎の思想を参照しながら明らかにしたい。

まずソローの作品について問われている「いま/ここ」の不在について確認したい。野田研一は論文「いま/ここ」において、ソローの作品について、彼の後継者と目されるネイチャー・ライター、アニー・ディラードを引き合いに、「アニー・ディラードが求めた〈現在〉をソローは排除し続けたのである。」(『ウォールデン』、828)と結論付けている。またその理由を批評家ビュエルの『環境的想像力』に求め、ソローの姿勢を、遠方のイメージを用いて今自分のいる場所をパストラル化してしまうソローとそのフォロワーの作家達に継続して見られる顕著な特徴であり、そこにはポスト・コロニアルな政治性が内在していると見る。ソローの作品に「いま/ここ」が本当に不在なのかどうかはやはり議論の余地があるが、彼の言説にロマン主義的影響があるのは明らかであろう。

ではスナイダーの視点は諸作において、どういったスタンスを取っているのだろうか。ソローとの比較で言えば、スナイダーの記述のスタイルは、一つ目に「目撃」することにこだわること、すなわち目の前の事象に注意を払うことである。そして二つ目に、「目撃」が常に現在に向けられているために、「いま/ここ」を書きとめることに結果として成功している。具体例を2つ挙げる。まず *Mountains and Rivers without End* に収められた”The Mountain Spirit”という詩の終わり、スナイダーは「山は仏陀である」という確信を、東洋の故事や詩に求めるのではなく、目の前に現前する松の葉の緑、花の赤い色に求めている。二つ目に、*Turtle Island* に収められた”On as for Poet”において、”Water is creation, the mud we crawled on, the wash of tides in the cells.” (*Turtle Island*, 114)と、水の流れのイメージを銀河や「忘却のレテ」に求めず、具体的な生態系という現前する事実に向けている例が挙げられよう。身体を持つ我々は、その身体をもってして、その行為によって自己となる。自らの行為には、その内部環境である身体が関係し、その外部環境である様々な現前する物が関係する。スナイダーが目撃する「いま/ここ」とは我々が自己を見る瞬間、時と場所である。

ここでスナイダーが「いま/ここ」に注視し、書き留める拠り所としているものを確認しておきたい。スナイダーが「いま/ここ」にこだわるのは、一つは彼の、一神教的西洋文明・思想への批判精神が背景にある。彼はエッセイ *Practice of the Wild* において、西洋文明を一神教的、排他的文明として、その歴史が人間とその他の自然を分かち、自然を搾取してきたと批判する。もう一つは、そのオルタナティブとして森羅万象の東洋思想を彼が援用することがあげられる。例えば、エッセイ *Earth House Hold* において、「あるがままの有りようをみる」古代日本人に倣うことで「いま/ここ」を見る議論に一つの示唆を与えてくれる (*Earth House Hold*, 143)。² また、*Mountains and Rivers without End* に収められた ‘With This Flesh’ の詩の冒頭で、今度は華嚴經の一節を引いている。また意識/知覚される全ての存在を「悟りの根」として、またそれ故仏陀を「花や実」とする華嚴經を「いま/ここ」を書き留めようとする自分の身体の拠り所としている (*Mountains and Rivers without End*, 75)。³

ではここでスナイダーが仏教的な思想を自らの諸作の核であると言える「いま/ここ」の理解に必要とする理由について考察する。それは一つ目に、「いま/ここ」の注視は、実在に目を向けさせること、二つ目に、それによってその「実在」を観る力を回復させること、三つ目に、我々が生きる世界を、生態系として捉え直すことが挙げられる。

一つ目の、「いま/ここ」の注視が、「実在」に目を向けさせることについて考えてみよう。スナイダーの引用した道元の言葉に「いま/ここ」を知ることで修行が始まるとあるように、仏教は「いま/ここ」に現れている実在を観ることを説く。「いま/ここ」に現れている実在とは、生命であり、生命が織りなす生態系である。仏教をはじめとする東洋の思想を、西洋哲学の観点から批判的に考察しつつ、西洋哲学のターミノロジーによる説明を試みた哲学者、西田の言葉はこの「実在」を次のように説明している。「実在と考えられるものは、その根底にどこまでも非合理的と考えられるものがなければならない」(全集 6, p.3)。つまり「実在」とはそれが「実際に在る」という合理的な考えに対して、非合理的なもの、つまりそれが「無い」ということを含まなければならないということである。「非合理的」とは、「実在」が「無い」という矛盾をも孕むものである。この論理は、それを生命に当てはめることで論理性をもつものとなる。例えば、春に前日までなかった草の芽には、かつて地中にあった種子の欠如が内在している。無いものが在る、在るものが無いと言う矛盾は生態系の常である。我々はほとんどの場合と不変なものが存在するという憶見で世界を眺めがちである。万物の実際の動きを静止させて世界を考える欧米の論理に対して、仏教が示す生命の論理で西田は「実在」を「我々の一瞬一瞬が死であるとともに生である」(全集 6, p.204)存在、刹那刹那に生成消滅を繰り返す縁起の世界として説明した。

¹ 「いま/ここ」とはヘーゲルが感覚を論じる時に、それに判断が加わった状態と区別するために用いた用語である。「いま/ここ」には時間と場所が意識されている。

² 具体的には、スナイダーは東洋の禅仏教的な考え方、特に道元の思想に共鳴しているようだ。たとえば *Practice of the Wild* で、己の「いま/ここ」を知ることで修行“practice”が始まるとする道元の言葉を引用している (*Practice of the Wild*, 25)。

³ これは、先に述べた”The Mountain Spirit”のモチーフになっていることも伺える。

二つ目の、「いま/ここ」にある実在を観る力を回復させる必要性は、スナイダーの言葉を用いれば、我々人間を生態系の一員として再定住させるためにある。例えば”Jackrabbit”において、スナイダーは、人間とウサギの遭遇で、野生のウサギが人間よりも相手のことをよく知っていることをあげ、同時にウサギの「耳」を強調してみせる (*Mountain and Rivers without End*, 78)。ウサギは自分の生死をかけて五感全てを研ぎ澄まして相手をみているはずだ。この詩は、人間が文明の中に身を置いたために、「いま/ここ」を理解する五感が野生動物に比べて退化した事実を示唆している。

生態系に再定住するということは、人間の身を再び、食物連鎖の世界に置くことでもある。これが先に提起した世界を生態系として捉えることに繋がる。自らの生命を維持するには、先のウサギのように五感を研ぎ澄まして、遭遇した相手を命懸けでみる必要性に迫られる。‘Piute Creek’においては、スナイダーは山の中で、暗闇で自分を凝視するクーガカヨーテの視線を感じる(*Riprap and Cold Mountain Poems*, 8)。耳をそばだて、匂いを嗅ぎ、凝視する動物にとって自分は獲物である。⁴世界は食うか食われるか死と隣り合わせの生態系として現れてくる。

生命全てが自分の中心＝場所を持ち、同時に自分を中心として周辺の方角には、襲い、食すことで自分の生命を否定しかねない別の生命が目を光らせている。スナイダーの諸作にある、「いま/ここ」から読める緊張感はこちらにあるといえよう。「いま/ここ」を凝視することはすなわち「生きる」ことである。「いま/ここ」とは生成消滅する縁起の世界に生きる場所と時間なのである。

【 引用文献 】

Gary Snyder. *Earth House Hold: technical notes & queries to fellow Dharma revolutionaries*. New York : New Directions Pub. Corp., 1969.

_____. *Mountains and Rivers without End*. Washington, D.C. : Counterpoint, 1996.

_____. *Riprap: and, Cold Mountain Poems*. Washington, DC : Shoemaker & Hoard, 2004.

_____. *The Practice of the Wild : Essays*. San Francisco : North Point Press, 1990.

_____. *Turtle Island*. New York : New Directions Pub. Corp., 1974.

西田幾多郎、『西田幾多郎全集』6、東京：岩波書店、2002年。

_____.『西田幾多郎哲学論集』I,II,III、岩波書店、1987年。

野田研一、「いま/ここ不在」、『ウォールデン』、京都: ミネルヴァ書房、2006年。

⁴ ここでは人間の倫理からすると「デモニッシュなる」危険な生命が合わせて語られている。西田はこの生態系という場所を以下のように説明する。「周辺なくして至る所が中心となる、無基底的に、矛盾的自己同一的な球が、自己の中に自己を映す…その周辺の方角が、これに対して、何処までも否定的に、悪魔的と考えられるデモニッシュなるものに満ちていると考えられるのである。」「(場所的論理と宗教的世界観)『論集』III,336.)